

氏名	瀧本 哲弘
学位の種類	博士(英語学)
学位記番号	甲第17号
学位授与年月日	2023年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)
学位論文題目	小学校高学年児童に効果的な外国語授業構成についての考察 —改訂型 PPP・TBLT 型・折衷型授業構成による単元指導の比較検証—
論文審査委員	委員 教授 柳 善和 委員 教授 城 哲哉 外部審査委員 深澤 清治 外部審査委員 築道 和明

審査結果の要旨

瀧本哲弘氏による本論文は、「小学校高学年児童に効果的な授業構成についての考察—改訂型 PPP・TBLT 型・折衷型授業構成による単元指導の比較検証—」と題して、日本の小学英語教育において、高学年児童に対して、どのような授業構成が効果的なのかを検証することを目的としている。

まず、先行研究から、Presentation-Practice-Production (PPP) 型授業と Task-Based Language Teaching (TBLT) 型授業の授業構成を定義し、さらに具体例を示し、Research Questions として次の3つを設定している。(1) TBLT 型授業構成のみの単元構成による指導と、改訂型 PPP 授業・TBLT 型授業折衷型単元構成による指導では、日本の公立小学校高学年児童における重点指導項目の定着について、どのような効果の違いがあるか。(2) TBLT 型授業のみの単元構成による指導と、改訂型 PPP 授業・TBLT 型授業折衷型単元構成による指導では、日本の公立小学校高学年児童の主体性について、どのような効果の違いがあるか。

以上の Research Questions について、協力者として、5年生時で50時間のみの外国語活動を経験している、日本の公立小学校に通う帰国子女を含まない6年生児童42名に依頼をした。TBLT 型グループと改訂型 PPP・TBLT 折衷型グループは、2019年4月から5月にかけて、そして、グループを交代して9月から10月にかけて、学級担任(HRT)または JTE・外国人講師(ALT)・学級担任(HRT)による、協力校の実情に基づいた授業を受けた後、ALT との1対1でのインタビュー形式で自分のことを英語で紹介する、

“Speaking Challenge” と題されたパフォーマンスを行った。

Research Question(1)の効果の検証については、①ALT との 1 対 1 でのインタビューにおけるパフォーマンスについて、正確さ、流暢さ、複雑さの数値データ、②インタビューまでの授業終末時及びパフォーマンス後の参加者による主体性に関する小学校英語評価研究会(2015、2018)の『Hi, friends! 2』、『We Can! 2』に準拠した観点をを用いた 4 件法形式の Can Do 評価の数値データ、③インタビュー後の参加者による自由記述形式のコメントのテキスト分析データの、主に 3 種類のデータを比較した。

検証の結果として、まず、概ね改訂型 PPP・TBLT 折衷型単元構成で児童を指導するのが効果的であるとしている。また、折衷型単元構成による指導と TBLT 型単元構成による指導との比較では、重点指導項目の正確さ、流暢さの定着において、折衷型の単元構成が効果的であった。これは、4～5 月の検証では正確さと流暢さ、9～10 月の検証では正確さの項目で折衷型グループに有意な結果が得られたことから導かれる。また、4～5 月の TBLT 型グループの方に、正確さの項目でより大きなパフォーマンスのばらつきがあったことから、TBLT 型授業のみの単元構成による指導は、外国語学習が得意な児童はどんどん学習を進めていくことができるが、苦手な児童はなかなか学習を進めることができなかつたのではないかと推察されるとしている。

Research Question(2)については、折衷型単元構成による指導、TBLT 型単元構成による指導、及び、改訂型 PPP 単元指導では、日本の公立小学校高学年児童の主体性について、両方の指導に差異はないとしている。これは、ALT とのインタビュー時ならびに、通常授業時の主体性の自己評価についても、明確な差異がなかったからである。この点について、目の前の学習者の状況に応じて、臨機応変に授業構成を工夫することが重要であるとしている。

Research Question(3)については、折衷型単元構成による指導、TBLT 型単元構成による指導、及び、改訂型 PPP 単元指導では、日本の公立小学校高学年児童における重点指導項目についての学習以外に、どのような効果の違いがあるかについては、テキスト分析による検証結果から、総合的に観て児童にとっては折衷型指導がよりよいものであるとしている。これは、いずれの指導法も児童の自己効力感に効果があった反面、TBLT 型グループでは英語表現の練習時間に個人差があり、そのことが児童の緊張感や「できなかつた感」を招いたと考えられたからである。また、改訂型 PPP グループにおいても、折衷型グループには見られない強い緊張感が見受けられたとしている。

論文の評価

第1に、本論文は、わが国の学校教育に定着してきた小学校外国教育において、豊富な実戦経験をもとに効果的な授業構成を模索しようとする試みであると考えられる。その中で、海外での研究結果をそのまま鵜呑みにするのではなく、日本的な文脈を考慮しながら、日本人小学校高学年児童を対象とした単元指導実験を一定期間実施することで効果の実証的検証を行ったことには意義があると考えられる。

特に、次の3点について評価されるべきであろう。

- ① 研究対象を小学校高学年児童とした希少な研究テーマであること。
- ② TBLT型、改訂型PPP型などの具体的な授業構成からその結果を一定期間にわたって数量的に比較対照している。
- ③ 授業構成の違いによる成果を重点指導項目の定着に加え、児童の主体性など非言語面、情意的側面での伸長なども比較検証しようとしていること。

第2に、教室実践に基づいた教授法の比較研究は、1970年代にそれまでのAudio-Lingual Methodに対する新しい教授法の開発・提案といった文脈で米国を中心に行われてきた。その後、唯一の教授法があらゆる教室に有効であるといった教授法信仰の前提が崩れ始めて、特定の教授法を複数比較研究する研究デザインはあまり見られなくなった。その点で、日本の小学校における高学年を対象とした複数の教授法による比較研究を試みた点でも、本論文は評価に値すると考えられる。

以上の点を総合的に考慮して、審査委員会は瀧本哲弘氏によって書かれた本論文に対して博士号を授与することが適当であると判断した。